

平成24年度第2回岩手県工業技術センター運営諮問会議議事録

日時：平成25年3月14日（木）9:30～12:30

会場：岩手県工業技術センター大ホール

議事項目一覧

1 開 会

2 挨 拶

3 報 告

- 1) 研究推進会議の設置について
- 2) 平成24年度基盤的・先導的技術研究推進事業の結果について
- 3) 平成25年度基盤的・先導的技術研究推進事業の概要について

4 協 議

- 1) 平成25年度基盤的・先導的技術研究推進事業について
 - ① モバイル端末を用いたM2Mシステムに関する研究
 - ② 鋳鉄溶解炉の保温性向上技術の開発
 - ③ 石村工業製汎用型攪拌機における野菜類の洗浄技術の開発
 - ④ 新テイスト清酒の開発と頒布酵母の性能把握と条件設定
 - ⑤ コンウッドシステム圧縮処理材の保存と加工性について

- 2) 総評

5 閉 会

1 開 会

○鎌田公一企画支援部長が開会し、以後会議の司会進行を務めた。

2 挨拶

(阿部健理事長)

本日はお忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。また、日頃よりご支援をいただきまして感謝申し上げます。

前回の会議で、この会議の担うべき内容がわかりにくいというご指摘をいただきました。この会議では、当センターのシーズ作り、外部資金獲得の前段階である自主財源による基盤的先導的技術研究推進事業について毎年度ご意見を伺ってきたところであり、今後におきましてもこのことを内容として進めていく考えであります。このことから、会議の内容に合う形で、また、この会議の名称につきましても会議の中身を端的に表すものとして、名称を「研究推進会議」とし、平成 25 年度より運用を図りたいと考えておりますので、よろしくご願ひ致します。

本年度の当センターの事業の状況と来年度の事業について若干申し上げます。本年度については復興支援を柱に進めてきたところであります。復興支援室を中心として、被災地の企業訪問数は4月から1月までで247社、支援件数はのべ730件余となっております。特に「いわてデザインネットワークボランティア」を当センターが事務局となって立ち上げ、ボランティアで被災地企業の商品パッケージデザインの支援を行っております。また、当センターの基本サービスについては、その年間目標が技術相談では約3,000件、依頼試験では約4,000件、機器貸出は1,600件となっており、これらは、ほぼ計画目標達成の見込みであります。また、研究事業につきましては、県からの受託研究、競争的外部資金、共同研究、それから今日ご意見を頂戴する自主財源研究といった種類があり、今年度の研究テーマ数は71件という状況です。

平成 25 年度の基本方針では、引き続き、震災復興支援を掲げ、被災企業の課題解決に向けて関係機関と連携をしながら、その具体化を図りたいと考えています。また、県の産業施策と連動する自動車、半導体、医療関係、地域資源型産業などの研究を推進し、その事業化に向けた取組みを強化していきます。さらに、信頼されるセンターづくりにも取り組んでいきます。そのためにも、次年度は積極的にこちらから企業に出向いていきたいと考えております。

引き続き委員の皆様にはよろしくご指導等ご願ひ致します。

3 報告

1) 研究推進会議の設置について

○参考資料により小山康文副理事長が説明した。

2) 平成 24 年度基盤的・先導的技術研究推進事業の結果について

○資料 4 により藤澤充理事兼企画統括部長が説明した。

3) 平成25年度基盤的・先導的技術研究推進事業の概要について

○資料5により藤澤充理事兼企画統括部長が説明した。併せて資料6により口頭発表を行う5つのテーマの選出理由についても説明した。

[報告の1)～3)について、質疑応答]

(A委員)

平成24年度の復興支援関連研究No.8(資料4)のテーマの取り扱いが保留となっているがこれはどういう意味か。

(佐々木英幸理事兼技術統括部長)

ワカメの芯の除去方法の効率化を目標としたが、良い方案が見つからずいったん保留としたもの。引き続き情報収集を進め、複雑な装置に頼らない簡潔かつ適切な方策が着想できたときに再度研究テーマとして復活提案したい。

(B委員)

平成25年度の基盤的・先導的技術研究推進事業研究テーマ一覧(資料5)で共同研究機関が記載されていないものは、特定の相手を想定していないという意味か。それから、平成25年度の研究テーマは、技術力向上を目指すもの、あるいは、さらに外部資金の獲得を目指すものという分けがあるか。それともこれらのテーマはすべて外部資金獲得を目指すものか。

(佐々木理事兼技術統括部長)

全部の研究テーマが企業様と関係があるもの。例えば平成25年度研究テーマ一覧のNo.2の「レーザー光を活用した精密加工に関する研究」は、沿岸地域の企業様と関係している。No.3「鋳鉄溶解炉の保温性向上技術の開発」の展開先は、県内鋳物、鉄器産業で、No.10「コンプウッド圧縮処理材の保存と加工性について」も県内木工業者と連携していこうというものである。すべてが外部資金を獲得するというものではない。それぞれ場合によって外部資金獲得を目指したり、事業化のために製品開発を目指すものもある。

(C委員)

平成24年度基盤的・先導的技術研究推進事業結果一覧(資料4)のNo.9「鋼製刃物の操作性に関わる研究」について注目していたが、この研究の実現化、実用化の目標はあるか。

(佐々木理事兼技術統括部長)

メスやピンセットなど30種ほどの小物の中で、既に実用化しているものや企業と開発中のものがある。それらには、CCM合金を使うべきものと鋼でも製品化できるものがあり、鋼が使えるものは医療器具の他に工業分野に応用できる製品がある。これら製品ごとに製品化のロードマップを用意している。

4 協 議

1) 平成25年度基盤的・先導的技術研究推進事業について

○各研究担当者により口頭発表を行った。

① モバイル端末を用いたM2Mシステムに関する研究

(発表者 電子情報技術部専門研究員 野村翼)

(D委員)

一番のカギは、データベースと、どのようなフォーマットにするかということだと思うが、具体的なターゲットに対するそれぞれの作り込みを簡単にできるようなデザインにする必要がある。そのあたりの考えはどうか。データベースの構造などによってコストなども変わってくる。

(野村翼専門研究員)

ニーズに対応するために、まずは単純な数値データを取り込みたい。ニーズによってセンサの数などは変わってくると思う。センサからサーバーまではそれぞれ事例ごとに特化しなくてはいけない。

(D委員)

ネット経由でデータを送るのは世の中にたくさんあるので、それを今更やってもしよがないと思う。やるべきことは、いろいろあるターゲットごとに適した対応を簡単にコストがかからずに作り込めるような仕組みにすること。

(野村翼専門研究員)

ご指摘ありがとうございます。検討したいと思う。

(E委員)

湿度センサはどのようなものを使われるか。

(菊池貴専門研究員)

現在試験を行っているハウスでは、既存の温湿度用のセンサノードを使っている。

(E委員)

温度センサと違って湿度センサは耐久性が低い。劣化しやすいのでデータが取りにくいという問題点がある。システムを考えるときに湿度は非常に大事なところだと思うので検討されると良い。

(菊池貴専門研究員)

昨年半年ほどハウスで試験を行ったが、ハウス内ではかなり高温多湿なデータが得られて、センサにとって悪い環境下で稼働していることがわかった。センサがダメージを受けないような筐体も検討したい。

(F委員)

キャリア契約は研究費で認められるようになったか。

(菊池貴専門研究員)

WiMAXの契約はしているが、八幡平市ではWiMAXの電波が届かない。携帯電話の契約は、まだ認められていない。

(F委員)

工業技術センターとしては携帯電話の契約はできるのか。

(菊池貴専門研究員)

現在セキュリティに関するルールを策定中なので、それと協議してからということになる。

(F委員)

これは、ぜひ進めていただきたい。ワイヤレスなどキャリアが今すぐ使えない状況だが、実証実験を行ううえでこれを使って遠隔地と通信することは必須である。セキュリティルールなど導入の方法をぜひ策定していただかないと実験が進まない。遠隔地の風力発電などキャリアを使ってモニタリングすることは絶対に必須条件なので、そのような環境整備を進めて欲しい。

② 鋳鉄溶解炉の保温性向上技術の開発

(発表者 ものづくり基盤技術第2部 主任専門研究員 高川貫仁)

(E委員)

耐火材、保温材は市販品を使うのか。

(高川貫仁主任専門研究員)

市販品を使う予定である。

(E委員)

断熱材の材料はセラミックス系か。

(高川貫仁主任専門研究員)

セラミックス系の気泡率の高いものを予定している。

(E委員)

木炭とコークスの発熱量の違いについて話題があったが、木炭の種類には黒炭と白炭があって発熱量が異なるが、どちらを使う予定か。

(高川貫仁主任専門研究員)

黒炭を考えている。

(E委員)

白炭であれば黒炭より発熱量が大きく、コークスと同じ発熱量があるのではないか。

(高川貫仁主任専門研究員)

白炭を使った経験では、溶解した鉄と木炭が炉の下部になかなか下ならず、溶解に大変時間がかかるので、黒炭を使いたい。

(G委員)

1,450度からの温度降下速度を遅くしたいということで、これを築炉材から検討するようだが、炉の他の場所で温度降下があるのではないか。温度降下している場所に焦点を合わせて研究を進めた方が良いのではないか。

(高川貫仁主任専門研究員)

現状では、炉全体がかなり高温となっていて、熱が逃げていることがわかったので、まずは、炉全体を断熱することを考えた。

(G委員)

それは、測定して確かめたのか。

(高川貫仁主任専門研究員)

まだ測定していない。

(G委員)

測定した方がいい。本当に築炉材の問題なのかどうか疑問を感じる。

(高川貫仁主任専門研究員)

空気を送り込むところは1,500度程度だが、溶解した鉄と燃料が炉の底部にたまったとき、コークスはまだ温度が高いが、木炭は早く燃え尽きてしまい温度が低下すると思っている。そのため炉の底部の保温性を主に向上させたい。

(G委員)

温度が下がる場所が、炉の下部なのか、取鍋（トリベ）の所なのか、鑄型に流し込むときなのか、場所によって要因、特性が違ってくると思うが。

(司会 鎌田公一企画支援部長)

今のご助言は、どういう温度履歴を経過して鑄込まれるのか、一度精細にチェックしたうえで最も効果的な方法を選択すれば、より効率的効果的な結果が得られるのではないかということだと思う。

③ 石村工業製汎用型攪拌機における野菜類の洗浄技術の開発

(発表者 食品醸造技術部 主査専門研究員 小野寺宗仲)

(G委員)

この装置のプロペラは一段か。

(小野寺宗仲主査専門研究員)

はい、一つの円盤に6枚の羽が付いている。

(G委員)

回転数は品物の表面を傷めることがある。それを効率よくするためには回転数を変えるのではなく、例えばプロペラを3段にして、1段目と3段目は右回りの水流を発生させて、2段目は逆方向の水流が発生するようにすれば、水流で洗える可能性がある。キクイモのようにコブが多くてゴミの取りにくいものは、前処理で切り分けるという補助

作業も必要でないか。

(小野寺宗伸主査専門研究員)

おっしゃるとおりだと思います。

(H委員)

野菜の洗浄のイメージは何回も洗ってきれいにしていくというイメージがあるが、この装置の場合一回洗った後はどうなるのか。

(小野寺宗伸主査専門研究員)

キクイモについては一次処理としてある程度きれいにしたいということだ。30分位で汚れが取れれば、後は手作業できれいにすれば良いというもの。生シイタケの場合も一次処理としてゴミ取りを行い、その後手作業できれいにするという。この装置はゴミや異物を取り除く一次処理に使うものである。

(B委員)

水温は？。

(小野寺宗伸主査専門研究員)

水道水をそのまま使うことを考えている。

(B委員)

コスト高になるが、水温が30度、40度位になれば洗浄効果が上がるのではないかと。また、柔らかいブラシ状のものを同時に回せば隙間のゴミにも効果的ではないかと。

(小野寺宗伸主査専門研究員)

キクイモのコブが複雑なものはそれほど多くはないので、手作業でも対応できると考えている。

④ 新テイスト清酒の開発と頒布酵母の性能把握と条件設定

(発表者 食品醸造技術部専門研究員 佐藤稔英)

(I委員)

全国的に知名度を上げるには、普通酒向けではなく「ゆうこの想い」ができた時のように純米酒や本醸造向けのような酵母に期待したい。

(佐藤稔英専門研究員)

普通酒用酵母を外から買っている現状で、岩手の清酒とはどのようなものかということを一言で表せる状況が無い。こんな酵母でこんな特徴を持って岩手はこういう方向へ進むというベクトルを示したい。それによって全国的に見て岩手のお酒は、こういうものだというイメージを与えたいと考えている。焙煎麴に関しては、明らかに普通の醸造清酒とは違う。コーヒー様の香りで幅広い嗜好の消費者に合わせられる特徴を持った清酒になると思う。いわての清酒としてインパクトを持ったものになればよいと思う。

(G委員)

このテーマである、岩手の清酒の商品コンセプトと流通コンセプトを整理して研究に

臨まないといけない。消費者ニーズ、市場ニーズがないがしろになってはいないか。工業技術センターのシーズが先行してはいないかなどと感じる。

焙煎麴に関してどの程度焙煎するのか。焙煎の程度によって熟成の程度も変わるので、それを把握して研究を進めて欲しい。

(佐藤稔英専門研究員)

ありがとうございます。今の岩手清酒とは何かを考えつつ進めていきたい。岩手の各お蔵ごとの特徴はあっても、“岩手の清酒はこうだ”という共通の商品コンセプトが今のところ打ち出せていない。酵母を利用することが商品インパクトを出す一つの方法であることから、今回は普通酒用酵母を提案するものである。

麴の焙煎度合いは精細に調べている。その結果として、やり過ぎると清酒として成り立たなくなる。来年度の検討課題として、焙煎温度と時間をさらに精査する必要があると考えている。

(I委員)

コクがあって膨らみのあるようなタイプの清酒にしてもらいたい。石川県でノンアルコール清酒を造っている例があるので、そういったものも今後手がけて欲しい。

(佐藤稔英専門研究員)

ノンアルコールで米の旨味を引き出すノンアルコール清酒は技術的レベルがかなり高いと思う。今後の検討課題としたい。

⑤ コンブウッドシステム圧縮処理材の保存と加工性について

(発表者 企画支援部 専門研究員 内藤廉二)

(E委員)

コンブウッドシステムは外国のものと聞いているが、国内で他に使っているところはあるか。

(内藤廉二専門研究員)

デンマーク製の機械である。企業として使用していることを一般に公表しているところはない。

(E委員)

湿度保持のためにラップで包むだけでなく、アルミパックが湿度、鮮度保持に有効なので検討されてはどうか。それと、広葉樹に限った検討ということだが、スギの利活用が全国的に求められているので、併せて検討してはどうか。

(内藤廉二専門研究員)

コンブウッドシステムのメーカーは広葉樹の適用しか示していないが、針葉樹について試験した結果では、スギは座屈が激しかったが、アカマツは可能性がありそうなので今後も検討してみたい。ただし、節の現れる間隔が短いため用材の寸法が制限されることがある。

(C委員)

将来は、岩手県工業技術センターの設備を企業が利用するというイメージか。

(内藤廉二専門研究員)

コンプウッドシステムは貸出機器になっているので、当センターで加工した材料を持ち帰っていただいて、曲げ木加工することが可能となる。従来の曲げ木は蒸してすぐに曲げなくてはならないが、コンプウッドシステムで加工した材料は、乾燥させなければいつでも好きなときに曲げ加工できる。

(I委員)

加工できる材料の大きさはどの程度か。また建材に利用できるか。

(内藤廉二専門研究員)

断面寸法 80 ミリ×120 ミリ、長さ 3メートルまで。寸法の制限があるが、使い方によっては利用できると考えている。

(司会 鎌田公一企画支援部長)

以上で 5 つの研究テーマをご審議いただいた。委員の皆様からのご助言を平成 25 年度の研究に活かして進めて参りますので、よろしく願いしたい。

2) 総評 (委員からの講評、コメント)

(H委員)

岩手の中小企業の食品開発を考えたとき、大手企業とは違うことをあらためて感じる。先ほどの口頭発表の中でキーワードに“オリジナル”、“ブランド”という言葉があったが、オリジナルとかブランドとは一体何を意味しているのかわかりにくかった。例えば、岩手の清酒に統一されたブランドがはたして必要なのか。一定の技術レベルにあるのなら、蔵ごとに多様なニーズに応える清酒を造り出せるように技術支援して、全体をレベルアップすることで岩手のブランド価値が高くなるという考え方でもいいのではないか。伝統産業の従来技術を科学の目で見えて、支援することが工業技術センターのすべきことだと思う。

(C委員)

非常に予算の少ない中で一所懸命基盤的・先導的技術研究推進事業に取り組んでいるというのが第一印象。企業ニーズを元にしてしているということだが、清酒に関しては清酒を飲み慣れている人をターゲットとするのか、飲まなかった人をターゲットとするのか、という原点をあらためてディスカッションする必要があるのではないか。

曲げ木に関しても、どういう利活用方法があるのかももっと探っていく必要があるだろう。

和銃(わずく)のテーマは、平成 26 年度から予定している炉の開発という基本的なことも平行して検討していくべきではないかと思う。

(I委員)

野菜類の洗浄機械は、酒米の洗米機なども参考にするとよい。超音波洗浄も応用してみてはいかがか。

オリジナル醤油種麴については、目的と仕様がわからないが、ぜひ目的をはっきりさせて取り組んで欲しい。

工業技術センターがもっと活用されるように、商工会議所などを通じて活用の機会を増やす提案をして欲しい。

(J委員)

モバイル端末を用いたM2Mシステムに関する研究は、システム開発の規模、汎用の範囲、価格帯なども含めて最終目標を具体的に示して欲しかった。

野菜の洗浄のテーマについては、一般に野菜の洗浄というと生食野菜の洗浄ととらえて水洗から殺菌まで含まれるので、テーマに一次洗浄用であるということを加えたい。工場で使用する場合には水をどのくらい使うのか、それを滞留するのか排水するのか、あるいは屋外で洗浄するのかなどの条件を加味しなくてはいけない。例えば、一次洗浄で、あくまで屋外使用に限るとすればイメージがつかみやすい。

岩手の清酒については、口頭発表されたテーマの他に雑酒や焼酎のニーズの掘り起こしができないかと思った。

コンプウッドに関しては、どういう商品に使えるのか企業の皆さんを集めてニーズから取り組んだ方が早いのではないかと思った。

(G委員)

企業訪問の情報について企業ごとのニーズを共通ファイルに登録して、研究員が企業訪問する際にはその情報を一読して出かけることを勧める。

もう一つは、売れるものを作るのがどちらかというと大企業の方式だが、売りたいものを作るのが中小企業、岩手の食産業の基本となる考え方の一つと思う。企業ニーズ、消費者ニーズというより各企業のシーズをどうするか、自分の技術をどういうふうに転用するか、具体的にしていくのが今の状況であろう。売りたいもの売れるものの開発があって良いのではないか。先ほどの焙煎麴は、人のやらないことをやっていく商品コンセプトを明確にしてPRすることが必要だ。

(E委員)

「モバイル端末を用いたM2Mシステムに関する研究」は全国的に取り組まれているので、いかにシンプルにお金をかけないシステムを作るかということが課題だと思う。

「鑄鉄溶解炉の保温性向上技術の開発」は、将来的には炉材メーカーと一緒に組んでさらにいいものを作っていくということも大事かと思う。

今日一番感じたのは、ニーズに対してぴったりの相手企業を見つけるシステムが大事だということ。良い相手が見つければ研究の内容も思いがけない発展が期待できる。企業訪問したり研究会を立ち上げたりする中で、いい相手に会うにはどうしたら良いかを目標に頑張っていたきたい。

(B委員)

地元の企業の皆さんの技術支援、研究開発支援を対象に少ない研究員が多くの課題を手がけていて、平成 25 年度は研究テーマ数を絞って集中的に手がけるという印象を受けた。研究開発が進んでも、中小企業の皆さんは資金が潤沢でないという状況もあるので、ぜひ公的資金、競争的外部資金への提案を目指した研究開発活動や金融機関等の資金を活かしながら事業化へ進める取り組みをしていただきたい。

全国的に、特に東北においては、再生可能エネルギー研究開発に重点的に取り組みは始めているところだが、もし企業ニーズ、要望が多いようであれば、再生エネルギーの観点からの研究テーマを取り上げてはどうか。No.1 の風力センサの情報を集める課題について、風力発電に必要な情報は“風況”というもので、一体どんな風が吹いているのかということを的確に把握しなければならない。単なる気象条件ではない。イチゴの栽培も、何を測定して、それをどのように活用して要件をそろえていくかということだ。どちらも本当に必要で有効なデータを収集するシステムを作り上げれば活用されると思う。

(K委員)

今日の話聞いていて、農業や水産業という岩手県の一次産業が、ものづくりを担う工業技術センターが仲立ちをしてコラボレートしている姿が発表の中に多く見られたことは大変評価できる。特にセンサネットワークや石村工業さんのテーマなどによく現れていた。確かにセンサネットワークは、各社からたくさん売り出されているが、それが現場のユーザーが使うまでになっているかという点意外にそうでもない。畜産関係とお付き合いする機会が多いが、センサネットワークに関係する技術は進んでいるものの、実際に使われているところがない。これからは、現場に結びつくような普及の方法も考えてもらわないといけない。特に、ものづくりの担い手である工業技術センターと農業関係、林業関係のセクションなどとの横のつながりを深めて、それが現場につながるようにする普及のあり方が課題であると思う

(A委員)

清酒の話題があったが、これだけ岩手県の杜氏さんが日本全国に出かけていることそのものが岩手のブランドと受け取ることができる。造る技術ではなく、売り方ではないかという感じもする。

復興支援のテーマの中で「保留」というのはまずいと思う。こういう支援は、早く結論を出すことが大切だと思う。できなければできない、継続するなら継続すると結論を出さないと頼んだ方が困る。

(F委員)

私の専門は情報関係ですが、口頭発表のNo.1 のテーマについては、皆さんのご指摘のとおりだと思います。

コンプウッドシステム圧縮処理材に関しては、個人的に「Yチェア」という椅子が好きで、デザインと座りやすさ、軽さなどトータルな性能に感銘している。材料を活かすということは、デザインや機能性という課題につながることである。それらのコンセプト

トが、これからコンブウッド圧縮処理材の製品化を支援していくうえでポイントになると思う。

(D委員)

来年度から運営諮問会議が研究推進会議に移行することは正しい方向だと思う。前回の運営諮問会議では予算の話がなかったが、今回の資料には参考資料として載っている。気になることは予算に関して三種類のデータが載っているが、つじつまが合っているようには思えない。予算のはじめにある受託研究の収入と支出が同じだということは単に県からもらってどこかへお金を流しただけなのか、そもそも三種類の予算資料の数値が何に相当しているのか意味がわからない。

もう一つは、企業を訪れたらその情報をまとめるということはその通りだ。多くの情報の中から必要なものを拾い集める操作が当然必要だと思う。そのためには、ネット環境は非常に重要なわけだが、この会場に来て無線LANが無いことがわかった。このような施設にはほとんど必ず無線LANが設備されているので、私は、その場で疑問があったらネットで調べることが非常に多い。今日も、わからないことがたくさんあってもネットで調べればすむことが多かったかもしれない。やはり、無線LANくらいは設備していただきたい。

5つの口頭発表の内容に関しては、地場産業と結びついて取り組もうという姿勢が非常に強い一方で、本当に広いものをカバーする方向にあるのかという疑問が生ずるかもしれない。

個人的に農業と工業の接点について考えているが、それについてはいろいろな話があつて良かったと思う。

酒については、岩手のおいしい焼酎があつたらいいと思っている。

(L委員)

自主財源研究の予算も一覧に記載するべきだ。研究員のエフォートと予算規模が出てくればわかりやすい。

「モバイル端末を用いたM2Mシステムに関する研究」については、工業技術センターで取り組む必要があるのかと思った。つまり、本当に必要であれば、ソフトウェア企業に相談して委託すれば、むしろ雇用の機会を増やすことができるかもしれないなどと工業技術センターの役割も考えてしまった。

辛口の意見を言えば、研究というものをつきつめて欲しいという思いがある。今日の口頭発表を聞いている限り、経験と勘と度胸というものづくりから出していない。工業技術センターとしてどのような科学的なネタを加えるのか、というポイントがプレゼンテーションのスライドに一枚欲しい。「鑄鉄溶解炉の保温性向上技術の開発」のプレゼンテーションに関しては、当然、炉内の温度測定はすでに済ませている話だと我々は思う。そのような測定結果を見てから研究テーマとして保温材が挙げたというプレゼンテーションを期待したいところだったが、今日のプレゼンテーションを聞いた限りでは不満があつたところだ。

県の施策に関するところでは、自動車、医療、半導体、環境のようなことなど4つほどあったと思うが、それに対して基盤的・先導的技術研究推進事業は研究員のポテンシャルを上げるために実施するのか、シーズを作っていくのか、そこに向けて何が必要かを考えたい。たとえば、再生エネルギーが注目されていて、県も風力発電や海洋発電をやるという場合、その中で、工業技術センターでもどういうふうにテーマを結びつけていくのか、若い研究員をエンカレッジして、数年後には大きく発展するようなテーマを今から作っていくというような戦略的なアプローチが非常に重要だ。それがちょっと欠けているのではないか。岩手大学もまさにそこにかけているところである。

岩手大学より県行政に近い立場の工業技術センターは、もっと地域のニーズを反映した基盤的・先導的技術研究推進事業でもいいのではないかと感じた。その他、感じたところでは、共同研究相手に岩手大学と書いてある場合は担当の先生も公表してもらえれば、学内で会ったときに応援の声をかけることができる。

(阿部健理事長より御礼)

基盤的・先導的技術研究推進事業を進めるにあたっては、まさに県内の中小企業のために取り組むという軸をしっかりとさせ、企業ニーズやマーケットのニーズの中で新規性を出しながらやっていく必要があると考えております。また、今年度の基盤的・先導的技術研究推進事業の予算については、総額で500万円の予算を組んでいます。一つの研究事業に対して予算が少ないというご指摘がございましたが、これ以外にも通常業務と併せながら進めていく中で必要性があれば、予算化していこうと考えております。

今日の委員の皆様からのご意見を伺い、商品化に向けたシステムの使いやすさやシンプル性の追求、マーケットに向けた商品のコンセプトの明確化、また、これらの研究がどう企業に還元されていくのかを考えていくなどその必要性を感じたところです。ご指摘を整理して基盤的・先導的技術研究推進事業の成果がきちんと出るように、また、事業化に向けて進むよう取り組んでいきたいと考えております。

さらに、所内における企業訪問の情報共有化については、今年度改良した企業支援システムの有効な活用を図るとともに、センターの周知に向けた広報活動や各地域での技術相談の開催などにも力を入れていきたいと思っております。

これからも引き続きご指導をお願いいたします。

6 閉 会